

気になる木

木について書いてみたいと思います。筆者は、よく自転車に乗って街を走り回っていますが、もっぱら気になるのは樹木です。貴重な緑を都会にもたらす樹木に、つい目がいくのでしょうか。

いま、気がついたのですが、木は生きものですから、それは都会で暮らす木と呼ぶべきかもしれません。人生には運不運がつきものですが、都会で暮らす木の生涯にも運不運がつきまっています。自分の意志で動くことのできない木は、どこに植えられ、いつ、どんな理由で伐られるか、その運命は常に人間の手に握られています。そんな生命の儚さも、都会で暮らす木が気にかかる理由の一つかもしれません。「あなたは公園に住んでいるからいいけれど、最近、なんだか測量してるでしょ。今年こそ、わたし、伐られるような気がして心配なの」。木々が交わす、そんな会話が聞こえるような気がすることもあります。木が話をするなんてというかもしれませんが、ドイツの元森林官によれば、木は地下にめぐらせた根を通して互いに情報を交換しているのだといいます。

ままならない運命の一方、樹木は人間の生命のスケールを遥かに超えて樹齢千年を数えることも珍しくありません。人間が木に惹かれるのは、さまざまな時の流れを木が教えてくれるからかもしれません。私たちは、新緑や紅葉によって季節の移ろいを知り、木の葉のそよぎによって風を知ります。「風立ちぬ、いざ生きめやも」。ナチスの強制収容所の窓から、毎日、一本の木を見つめることで希望を失わず、生還したユダヤ人女性の話を読んだことがあります。北インドの村では、まるで小さな森のようなバニヤンの大樹を何十人も女性が手をつないで囲

み、道路建設のための伐採から守ったといいます。

こうした人間と樹木の親密な関係はどのように生まれたのでしょうか。かつて、人間の遠い祖先である初期の霊長類は、現在のメガネザルほどの大きさで、敵から身を隠せ、食べ物も豊富な樹上で一生を過ごしたといいます。やがて、人類は地上に降り、アフリカから世界各地へと広がっていくのですが、母の胎内のような樹上への郷愁は人類に深く刷り込まれたのでしょうか。

ところで、あなたには、気になる木がありますか。たとえば、家並みを見下ろすような大樹はどうでしょう。下の写真は、西荻北のケヤキですが、この木は、マンション建設のために伐採されそうになると、署名運動によって生命を救われ、台風で幹に亀裂が入ると、樹木再生士の手当てで元気を取り戻す、そんな都会に暮らす木ならではの経歴を持ち、「トトロの木」と地元の人々に親しまれています。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男

